

福島県 中学校長会 広報

・就任あいさつ	1
・第62回福島県中学校長会総会	2
・平成24年度 組織及び役員一覧	2
・学校教育の今日的課題	3
・平成24年度県中学校長会の活動と運営	4～5
・第63回全日本中学校長会総会	6
・支会情報と特色ある経営 (福島・石川・両沼・双葉)	7～10
・随想	12



就任あいさつ

福島県中学校長会会長 根本 眞

初めに、一昨年度末から昨年度において東日本大震災、さらには東京電力原子力発電所の事故に伴う各学校における危機管理と学校運営に対して校長として判断し対応に当たられると共に、暫定的な県中学校長会の運営に対しても多大なるご支援を賜りましたことについて、心より厚く御礼申し上げます。

特に、昨年度8月まで定年を延長され、当面の危機回避にご尽力いただきました先輩校長、さらにこの3月、退職されました先輩校長の方々の長年にわたるご指導と多大なご功績に対して、心より深く感謝と敬意を表します。また、各校とも、学校経営・運営ビジョン等に基づき、全教職員の叡智を結集して編成された教育課程の実践、そして部活動等、校内外の生徒の活動が、活気あふれる中スタートされましたことをご喜び申し上げます。

さて、私こと、この度平成24年4月24日の第62回総会におきまして、歴史と伝統のある福島県中学校長会の会長として選任いただきました。浅学非才でありますので本会の歴史と重責に押しつぶされることなく諸先輩方々そして本会役員さらに事務局員のお力さらには会員各位のお力をお借りしてこれまでの県中学校長会の歩みを踏まえると共に、本会の活動理念と方針に基づき、本県中学生が原発事故という想定外の被害を受け様々な制限を受けている環境ではありますが、「自己の夢実現に向け、力をつけ互いに関わり合いながら生き生きと活動できる中学校」をめざしてまいりたいと考えておりますので会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

課題は山積していますが平成24年度の県中学校長会の運営に当たり「ふくしまの復興は教育から」を原点に据え、次の5つの観点で踏まえ職責を果たす覚悟です。

1 確かな学力の定着に努める

- ・ 生徒が主体的に学ぶ授業の創造に学校全体で組織的に取り組むこと

- ・ 震災による様々な困難が残る暫定的な体制においても「授業」を大切に知識や技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力等の活用力の育成に努めること

2 豊かな人間性と社会性の育成に努める。

- ・ 昨年度の想定外の災害において確認された人と人の絆を積極的な生徒指導の元、規範意識のさらなる醸成と情報モラル等の健全育成に努めること
- ・ 教育活動全体を通しての道徳指導の充実を図り、心に響き、心を耕す指導に努めること

3 部活動等の意義を再確認して内容の充実をめざす。

- ・ 運営上の課題等の整理と全校体制の確立をめざすこと
- ・ 生徒の可能性や個性の伸長に向け、保護者の理解協力等環境作りに努めること

4 教職員としての誇りを持ち使命感を持ち不祥事絶無に努める。

- ・ 情熱を持ち、仕事に対する使命感や専門性を持ち教育活動に当たる教職員の育成に努めること
- ・ 危機管理意識を一人一人に醸成するように組織や機能を生かしストレスを抱え込まない職場環境作りに努めること

5 開かれた学校作りに向け、情報や課題を共有し、連携に努める。

- ・ 保護者・地域社会へ情報提供に努め、役割と責任を自覚し連携を図ること
- ・ 教育関係機関（全日中・東北地区中・県中体連・県中教研等）教育行政・警察等との連携推進を図ること
- ・ 小学校・高等学校・特別支援学校等との連携や中学校同士の連携に努めること

以上の5点を柱に各支会の活動と連携を図りながら本会各専門部の積極的な取組を通して諸課題の解決に向け邁進する覚悟であります。

重ねて会員の皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成 24 年度 福島県小学校・ 中学校長会合同開会式

平成24年度第62回福島県中学校長会総会は、4月24日(火)、福島県教育会館を会場に開催されました。総会に先立って行われた小・中合同開会式では、小・中校長会を代表して、小学校長会会長丹野学氏があいさつし、続いて、来賓を代表して、県教育委員会教育長杉昭重氏、市町村教育委員会連絡協議会会長芳賀裕氏、元県小学校長会会長佐藤幹夫氏より祝辞をいただきました。次に、前県中学校長会会長鈴木昭雄氏が退会役員を代表してあいさつされました。



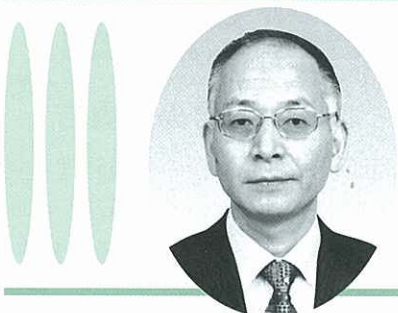
中学校総会では、高梨光一会長代行のあいさつの後議事に入り、平成23年度会務・事業の承認及び決算報告が上程どおり承認され、続く平成24年度の役員選出では、満場一致で根本眞氏（福島市立岳陽中学校）が会長に就任しました。新会長からは、「ふくしまの復興は教育から」を原点とし、「確かな学力の定着、豊かな人間性と社会性の育成、部活動の充実と個性の伸長、教職員としての誇りと使命感に基づく不祥事の絶無、開かれた学校づくりに向けた情報・課題の共有と連携」を柱に、各支会と連携して活動を推進していきたいとのあいさつがありました。

その後平成24年度事業計画及び予算案が、今年度の重点事項を中心に審議され、原案どおり承認されました。また、本会活動の推進にあたっては、震災及び原発事故後の望ましい教育環境の整備、新学習指導要領に即した教育活動の展開、全日中「学校からの教育改革」の理念と10の提言を踏まえた教育課題への対処、震災からの復興をテーマとした第40回県中学校長会研究協議会会津大会の開催など、会員の英知と創意を結集し、活力に満ちた学校経営に努め、県民の信託に応えようとの方針が確認されました。

平成 24 年度 組織及び役員一覧

※理事が2名いる支会は、○印が支会長、◎は常任理事

役職名	氏名	勤務校
会長	根本 眞	岳 陽
副会長	行財政部会担当	金子 英 昭 白 河 二
	研究部会担当	菊 池 芳 次 若 松 一
	進路指導部会担当	齋 藤 順 至 向 陽
	生徒指導部会担当	鈴 木 喜 三 郎 釀 芳
監 事	伊 藤 幸 夫 行 健	
	齋 藤 芳 信 本 郷	
	濱 名 新 一 浪 江	
理 事 *理事が2名いる支会は、○印が支会長	福 島	根 本 眞 岳 陽
	○福 島	◎山 寺 精 吉 福 島 二
	伊 達	鈴 木 喜 三 郎 釀 芳
	安 達	佐 藤 英 之 二 本 松 二
	○郡 山	伊 東 利 幸 郡 山 一
	郡 山	市 川 正 道 郡 山 二
	岩 瀬	渡 部 修 一 須 賀 川 一
	石 川	◎田 口 和 憲 石 川
	田 村	根 本 保 男 船 引
	西 白 河	金 子 英 昭 白 河 二
	東 白 川	古 川 晃 棚 倉
	北 会 津	菊 池 芳 次 若 松 一
	耶 麻	高 梨 光 一 喜 多 方 一
	両 沼	◎佐 藤 泰 高 田
	南 会 津	吉 津 政 一 只 見
	相 馬	齋 藤 順 至 向 陽
	双 葉	◎吉 田 隆 見 富 岡 一
	○い わ き	伊 藤 孝 俊 平 三
	い わ き	佐 藤 治 郎 勿 来 一
	事 務 局	事 務 局 長
行 財 政 部 会 長		小 山 金 也 福 島 三
研 究 部 会 長		佐 藤 和 彦 渡 利
進 路 指 導 部 会 長		阿 部 清 美 信 夫
生 徒 指 導 部 会 長		根 上 正 志 野 田
広 報 部 会 長		吉 田 政 弘 立 子 山
庶 務 会 計		菅 野 善 昌 福 島 一 黒 須 智 則 吾 妻



学校教育の今日的課題

「これからの学校教育に 求められるもの」

福島県中学校長会副会長 金子 英昭
(白河市立白河第二中学校)

5月下旬に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された第63回全日本中学校長会総会時の文部科学省の担当官の説明と、6月上旬にあづま荘で開催された県小・中学校長会合同理事会時の義務教育課長の講話を、それぞれ聞いて、感じたことを記してみたいと思います。

1 文部科学省の説明から

1日目の全日中総会後に、「当面する初等中等教育上の諸課題」と題する布村幸彦初等中等教育局長の講演があり、翌2日目には6名の担当官から新学習指導要領や全国学力・学習状況調査等について、そしてまた教職員定数の改善や教員の資質向上について、そしてまた地方財政措置や特別支援教育の推進について、それぞれ現状と今後の取組について説明がありました。

なかでも私が注目したのは、「これからの社会と学校に期待される役割」と「これからの教員に求められる資質能力」という部分です。

〈これからの社会と学校に期待される役割〉

中央教育審議会ワーキンググループの報告として、次の4点をあげていました。

- ◆ グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、高度化・複雑化する諸課題への対応と、求められる人材育成像の変化への対応が必要
- ◆ これからの学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や習慣の形成等を重視
- ◆ いじめ・不登校等への対応、特別支援教育の充実、ICTの活用等の諸課題への対応も必要
- ◆ 初任段階での学校現場の諸課題への対応に困難を抱える教員の増加、学校の小規模化による知識・技能の継承の困難化

〈これからの教員に求められる資質能力〉

これらの諸課題に対応するため、これからの教員には次のような資質能力が必要であるとしています。

- ◆ 教職に対する責任感、探究心、教職生活全体を通じて学び続ける力
- ◆ 専門職としての高度な知識・技能
 - ・教科や教職に関する高度な専門的知識
 - ・新たな学びを展開できる実践的指導力
 - ・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力
- ◆ 総合的な人間力（地域や社会の多様な組織等との連携・協働できる力など）

2 義務教育課長の講話から

県小・中学校長会合同理事会の2日目に吉田尚課長の講話があり、興味深い話の中で、今後の福島県の教育の在り方という視点から私が特に関心を持ったのは、次の点です。

東日本大震災を経験した今だからこそ、震災による喪失体験から新たな一步を踏み出すために「震災を経験して成長した自分に気づかせる」教育活動を展開したい。（吉田課長）

命の尊さ、普段の生活を送れることのありがたさ、人と人とのつながり、社会参加の必要性、自然の驚異、科学技術の脆さなどを実感し、社会的な広がりのある視点を持つことができているであろう子どもたち。そんな子どもたちを抱える学校がさらに求められるであろう各種教育として、吉田課長は次のことをあげていました。

- ◆ 防災教育
- ◆ ボランティア教育
- ◆ 福祉教育
- ◆ 放射線教育 等

平成24年度

「県中学校長会の活動と運営」

事務局長 君島 勇吉

大震災・原発事故と最悪の状況下にあった昨年度の本県にあっては、全てにおいて危機的であり、学校教育においても最も過酷な1年でありました。

そのような中であっても、校長は、各学校の運営の要となり、教職員ともども一刻も早い学校機能の回復、学校教育の正常化のために力を尽くしてきました。また、厳しい学校経営が求められながらも、各中学校では、新学習指導要領全面实施に向けて精力的に準備を進めてきました。

双葉支会、そして相馬支会の一部、福島支会の一部においては、原発事故で飛散した放射性物質の健康被害を避けるために避難生活を余儀なくされています。その中でも、やむを得ず休校措置を執らざるを得ない学校があることは、とても無念に思われてなりません。

本会の運営につきましては、昨年度は全てにおいて異例づくめでありましたが、本年度にあっては、可能な範囲で従来の活動を展開することを根本 眞 新会長を中心に確認したところであります。

そして、福島県内の中学校教育が向き合った問題を整理し、その解決をどのように図ったのか、後世の教育界に語り継ぐとともに、全国に発信する責務があることも理事会等で協議したところであります。(震災1年後の平成24年3月11日に発行できた報告書「ふくしまを生きる～福島県中学校長会からの報告～」は、後世の学校教育に必ず生かされるものと期待しているところです。)

放射線問題については、1年数ヶ月が経過する今日にあってはその解決の見通しは見えていません。そのような中において、福島県の学校教育の真の復興のためには、現状を調査・分析し、放射

線対応の様々な問題の解決や学校の危機管理の見直しに関わる様々な支援等について、迅速かつ的確な施策を行政機関、教育関係機関等へ強く要望・要請しなければならないと考えます。

本年度10月17日には、第40回福島県中学校長会研究協議会会津大会を開催し、神戸市教育委員会から講師派遣の支援をいただき「阪神・淡路大震災から学校教育復興に至る過程」を講話を通して研修する予定であります。また、「震災・原発事故に係る学校危機管理」についての8分科会による研究協議を開催し、福島県の各中学校が置かれている現状について情報を交換するとともに、今後の中学校長会が取り組まなければならない課題についての共通理解を深めたいと考えます。

私たち校長は、生涯学習の基盤を培う中学教育の果たす役割、そしてその重要性を深く認識しています。それだけに、生徒一人一人の個性を生かし、豊かな創造性を育成するとともに、非常時や困難な局面に向き合った時に自ら判断し行動できる力としての「生き抜く力」を身に付けた生徒の育成に努めなければなりません。各学校においては、学校教育の根幹となる教育課程の編成・実施にさらなる創意工夫を加える必要があります。校長は、自らの責任に基づく教育理念の具現化を図り、活力に満ちた学校経営に努めることにより、保護者や地域住民、さらには県民の信託に応える教育の実現が肝要であります。

今年度にあっても、各支会との連携強化を図るとともに、県小学校長会や高等学校長協会、その他関係諸機関との連携に努めながら、難解かつ膨大な諸課題の解決を目指したいと考えます。

会員皆様の深いご理解とご協力、そして積極的な取り組みをお願いいたします。

専門部会活動の概要

● 広報部会 ●

広報部会は、広報誌「福島県中学校長会広報」を年2回発行し、本会及び関係団体等の活動状況や会員に役立つ新しい情報などを提供し、広報活動の充実に努める。

1 本会の組織・運営、事業内容、活動状況を広

報する。

2 各支会の活動、本会活動への会員の意見や感想などを紹介する。

3 全日中や東北地区中など、関係諸団体の活動の概要を報告する。

4 関係機関との話し合いの概要を報告する。

(広報部会長 吉田政弘)

● 行 財 政 部 会 ●

昨年度は、大震災や原発事故の影響を受け、大幅な学級減や教員定数減、あるいは教員採用ゼロ等による未来を担う若い人材の県外流出等、本県教育は多大な被害を被った。現在も、再開の見通しが立たぬ学校や高線量に苦しむ学校等が多数あり、課題は山積している。

そこで、本部会では調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに加え「特別調査：大震災・原発事故の影響に係る調査」を昨年度に引き続き継続実施したところである。

1 当面する課題の調査研究活動

各校が抱えている課題をはじめ学校教育の現状を把握することにより、学校が自ら解決に向けて取り組むべきものと行政機関が果たすべき責務を明らかにする。

2 要望活動等

各調査結果を基に、明らかになった課題の解決や義務教育の充実・振興に向けた提案を具体的に構築し、要望活動等につなげる。

(行財政部会長 小山 金也)

● 進 路 指 導 部 会 ●

1 「生きる力」をはぐくむ進路指導の推進

- (1) 進路指導体制の改善・充実
- (2) 進路指導推進のための資料収集，整備活用の工夫

2 高等学校入学者選抜方法の改善に向けた高等学校との連携強化

- (1) 高等学校との連携強化…高等学校長協会・私立高校協議会との話し合い活動の推進
- (2) 高等学校入学者選抜方法の改善，要望活動の推進…入学者選抜方法・内容・震災対応等の課題の把握と改善のための資料作成

3 適正な進路指導充実のための諸調査の実施と資料提供

- (1) 進路指導に関する諸問題の把握と関係機関との連携
- (2) 学級活動の時間の充実のための副読本編集
- (3) 適正な就職指導，専修学校・各種学校等の選択指導のための指導助言活動の推進

(進路指導部会長 阿部 清美)

● 研 究 部 会 ●

1 各支会の実情に応じた研究活動の推進

- (1) 「研究の手引き」に基づき、8小主題による共同研究を推進する。
- (2) 10月17日(水)に福島県中学校長会研究協議会会津大会を開催する。震災・原発事故にかかわる学校危機管理に焦点化した内容のものとし、報告書を発行する。

2 研究集録の編集

研究主題に基づく第1年次の研究成果については、各支会でのまとめとし、県全体では平成25年度に研究集録を編集する。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

- (1) 6月21日、22日の東北地区中秋田大会では、第1分科会(教職員研修)で北会津支会が研究成果を報告する。
- (2) 10月4日、5日の全日中大阪大会においても北会津支会が第7分科会で発表を担当する。あわせて、他の分科会における他県の研究推進にかかわる情報等を収集し、各支会へ提供する。

4 震災・原発事故にかかわる資料の収集

報告書第2弾として、学校が向き合った課題、そしてそれらへの対応等についての資料を収集し、報告書発行の準備を推進する。

(研究部会長 佐藤 和彦)

● 生 徒 指 導 部 会 ●

東日本大震災から1年を経たという特異性の中で生徒指導を考える必要があり、安全教育の見直しとその実施・放射線対策は重点事項となる。また、今年度から本部会に調査機能を位置づけた。

1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした学習集団づくりに努める。

連携を生かした一貫性ある学習・生活習慣づくりの推進と毅然とした指導方針による規律指導

2 震災等にかかわる課題、不登校やいじめ、反社会的問題行動等当面する課題解決や未然防止に組織を挙げて対応する。

安全教育の見直しとその実施、心のケア、スクールカウンセラー等の活用状況調査

3 小学校及び高等学校・家庭・地域・関係機関・団体との連携を強化する。

事故防止、問題解決に向けての共通認識・行動連携の更なる推進

4 生徒指導関係刊行物を編集、刊行する。

「生徒手帳」の編集、刊行

(生徒指導部会長 根上 正志)

第63回 全日本中学校長会総会開催される 未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において 自立的に生きる日本人を育てる中学校教育

5月23、24日、平成24年度全日本中学校長会総会が東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、総会と講演、文部科学省行政説明が行われました。

総会では、大江近会長のあいさつと退会役員への表彰状贈呈、来賓祝辞がありました。退会役員への表彰では、鈴木昭雄前会長が功労者として表彰されました。

続いて議事に入り、平成23年度会務報告・決算が承認され、新役員として、会長に三町章氏（新宿区立西早稲田中学校）が承認されました。就任のあいさつでは、最初に被災地の校長への支援が取り上げられ、全日中として、行政では手の届きにくいことへの支援を継続的に行うとのことのお話がありました。次に、学習指導要領の全面实施に対応した望ましい学校環境を確保するための国への働きかけなど、「発信する全日中」「行動する全日中」としての活動の推進、校長同士が「我々意識」をもち、「有言実行」という行動理念で進んでいくこと、3年目を迎えた「全日中教育ビジョン～学校からの教育改革」をさらに進化させ「教育改革を進める全日中」として取り組んでいくことなどが熱く語られました。

文部科学大臣祝辞概要

文部科学省の布村幸彦初等中等教育局長が平野博文文科相の祝辞を代読しました。

はじめに、被災地を訪問し、「子どもたちが元気に学び、活動していること、その姿が社会に活力を与えると感じ、復興に全力を注ぐとともに、次代を担う子どもの育成に最善を尽くさなければならない」との思いを強くしたこと、登校中の子どもに自動車が突っ込むという痛ましい事故がおきたので、さらに関係諸機関と連携し安全確保に留意してほしいことなどが話されました。



次に、学習指導要領の全面实施に関連して次のようなお話がありました。

- 改訂の趣旨を十分に踏まえて、「生きる力」の育成を目指してほしい。
- 各学校の課題から目標を明確にし、PDCAのサイクルによる教育活動の実践と改善に取り組んでほしい。
- 震災後、改めて痛感させられた人と人とのつながりや地域の絆の大切さは、子どもたちの「生きる力」を育てる上でも重要なことなので、地域との連携・協同により「地域とともにある学校」づくりをさらに目指してほしい。
- 文部科学省としては、「教職員定数の改善」「教員の資質向上」「学校図書館や教材の充実」「全国学力・学習状況調査の実施」「地域コミュニティ再生の支援」などの諸施策に取り組み、学校教育を支援していきたい。

最後に、各中学校の校長がリーダーとして、創意を生かした学校経営をし、次代を担う子どもたちの育成に尽力してほしいとのことのお話で祝辞がしめくられました。

支会情報と特色ある経営

福島

福島支会の活動



福島支会長 山寺 精吉
(福島市立福島第二中学校)

公立小中学校の講師は大学院に派遣できると思いますかと、ある教育長さんに尋ねられたとき、講師は定数欠補や30人学級補正、育

休・病休の補充等で期限付任用だからできないはずだと考えた。教特法第2条第2項教員の定義にある講師(常時勤務の者)は一般の常勤講師のことだと思い込み、常時勤務の者と常勤講師とが必ずしも同義にならないことに気づかないでいた。答えに窮していると、教育長さんは任用期限を付さない講師の正式採用もあるのだよと微笑みながら教えてくださった。また、それはなぜか。

一日の終わりが始まりに多くの文書に目を通し押印する。あるいは多種多様な伺い書を決裁する我々自身が、それら一つ一つの真意を理解しているかどうか。伝統や慣例・前例・方針さらには通知の下、思考停止に陥っていることはないか。自戒を込めてなぜと問い、なぜに答える校長でありたい。

本支会は「会員相互の職能の向上と地区中学校の充実振興に努めること」を目的とし、県中学校長会や県中教研等の事務局を兼ねた会員26名(福島市22、川俣町2、福大附属2)の組織である。特別支援学校2校が含まれ校種を超えた情報交換も有益である。川俣町立山木屋中学校は、計画的避難区域にあるため小学校とともに移転し、川俣南小学校にて教育活動を展開している。

特に今年度は次の取組に力を入れていきたい。

1 課題解決を目指す定例校長会(年6回)

- 国・県の動向を捉えた各専門部会の充実
- 学校経営上の課題の共有と解決策の検討
- 震災・原発事故の影響に係る課題の解決

2 職能の向上を目指す研修会

- 学校の危機管理機能の向上
 - 組織体制づくり～人事の反省・課題と学校現場の実態・要望
 - 小学校長会、高校、関係機関との連携協力
- 言葉にすることは簡単だが、試行錯誤しながらも成果を上げていきたい。中学校教育のさらなる充実のために、現実を直視し正常化の偏見(バイアス)を排しながら学校経営に当たる校長が元気になる活動を進めていきたい。

《学校紹介》

「小中接続による課題解決」

福島市立蓬萊中学校

本校は、福島市南部の丘陵地に蓬萊団地開発とともに開校され34年目を迎える中学校である。一時は、1000人を超える生徒も、現在は団地の老齢化とともに半数を切っている。団地内には、2校の小学校があり、ほぼ全員が本校に入学している。生徒の通学区域はほぼ1km以内に集中し、小学校との距離も直線で500m程度である。就学援助を受けている家庭が3分の1、さらに特別養護施設からの通学生もおり、家庭的に恵まれない生徒も少なくない。生徒指導や学習指導でも問題が多く見られた。そこで、本校では、小中一貫した指導体制を確立すべく、小中3校が力を合わせ、課題解決に積極的に取り組んできた。その主な目的と内容は、次の通りである。

- ① 蓬萊小中6つのめあてを作成し、基本的な生活習慣や学習習慣を身につけさせること
- ② 生徒の情報交換を密にし、不登校生の解消など、積極的な問題解決に寄与すること
- ③ 生徒・児童の交流を通し、中1ギャップの解消に努めること
- ④ 地域の子どもは地域で育てるという環境を育てるため、小中連携したPTA活動や地域団体を巻き込んだ活動を推進すること
- ⑤ 小中の先生方、保護者の交流を進め、信頼関係に根ざした地域に開かれた学校づくりを進めること

生徒指導面でも学習指導面でも接続が進み、徐々に成果が上がってきている。子どもたちにも自信と誇りが芽生えてきているように感じる。

学習指導は、生徒指導と両輪を成すと言われるが、幼保とも連携し、さらに長いスパンでの連携のあり方を模索し、課題解決に努めたいと考える。

(校長 茅原 秀雄)



石川 石川支会の取り組み



石川支会長 田口 和憲
(石川町立石川中学校)

石川支会は今春、1名の転入会員を迎えました。昨年度8月の人事異動で1名の転入会員と2名の新会員を迎え、この2年間で8名中4名の会員入れ替えがありました。平成20年度に開校した私立中学校とも協力し合い活動を続けています。

この度の震災においては、地震被害も比較的少なく、各校の放射線量も $0.2\mu\text{s/h}$ 前後(計測初期)で推移し、日常活動に大きな支障のない地域として、他の地区よりも早く正常な日常を取り戻しました。(現在は $0.16\mu\text{s/h}$ 前後)

山間過疎地域で生徒の減少傾向に歯止めがかからず、今年度の生徒数は1260人不足と、10年前と比べて3割減、20年前と比べると、何と半分までその数は減っております。

生徒数の減少は、部活動数の減をはじめ、様々な教育活動に影響がでていますが、生徒は素直で、どの学校も落ち着いた特色ある教育活動が展開されております。

地区校長会は年5回の定例会はもとより、8名の会員が日々連絡を取り合いながら、協力的に活動を進めています。また、地区内の高校長とも協力的活動を推進しています

生徒指導部会では石川地区中・高生徒指導連絡協議会を組織し、年2回の研修会を開催し、地区の生徒指導に関して連絡を取り合い課題解決に向けた協議を行っております。

また地域の特性から水郡線で繋がる東白川郡との連携を図り、東石地区中・高校長連絡協議会を組織し、進路指導部を中心に入試関係の情報交換など、広く協議を進めています。

研究部会は平成25年度の東北地区中の発表を控え、第4小主題「健やかな身体の育成を図る教育の充実」というテーマに取り組んでいます。

さらに小学校長会との連携の下、服務倫理委員会を組織し、当地区からは絶対に教職員の不祥事を出さないという強い決意の下で石川支会の組織と意識の向上を図っております。

《学校紹介》

幼小中連携の推進

玉川村立須釜中学校

本校では、平成22年度より玉川村の幼小中連携強化推進事業に基づき、学校間の垣根を越え、地域や児童生徒の実態に即した、系統性・連続性のある指導に取り組んでいます。教職員の異校種間の交流や児童生徒の交流を含め、幼小中それぞれの学校において、シンプルで幼小中の3校種が無理なく継続実践していけるよう、『走る(体)』・『ことば(知)』・『思いやり(心)』をキーワードとし、11年間を貫く連携指導を行うこととなりました。

最もシンプルで体づくりの基礎となる『走ること』について、幼稚園では日々、園庭を走る活動を行い、小学校ではマラソンカードを活用して走ることに取り組み、本校中学校では、ほとんどの生徒が駅伝練習を兼ねて、毎朝、走ることに取り組んでいます。出勤時、校門のところで、外周へ走り出る生徒たちとその後ろを追うミニバイクの先生に出会いますが、その日々の努力と積み重ねに頭が下がる思いです。

2つめのキーワードである『ことば』は、学力の根幹を成すものであることから、幼稚園では絵本の読み聞かせにより本や言葉への関心を高め、小学校では村から児童一人一人に寄贈された辞書を使って、語彙習得のために調べ学習を行っています。中学校では、習得した言葉を駆使し表現する段階にあると考え、授業での表現活動に加えて、毎年、ディベートや文化祭での意見発表会に向けて、一人一人が全員の前で独自の意見を発表し合う取り組みを行っています。

『思いやり』の醸成については、特に対人関係に必要な『あいさつ』と『言葉遣い』を重点とし、玉川村幼・小・中全体で同一歩調で実践しているところです。



(校長 鈴木 健生)

両 沼

東日本大震災と支援活動



両沼支会長 佐藤 泰
(会津美里町立高田中学校)

このたびの大震災で多くの先生方も被災されました。いくつかの学校も被害を受け、今も学校の再開に向けて、本当にご苦労されている教育関係者の方々には、改めて頭の下がる思いでいっぱいです。

ここ会津の地、両沼地区では、校舎に軽微な亀裂が入るなどの被害以外には、物的・人的被害は見られませんでした。校庭の中心の空間放射線量も最大の学校で $0.48\mu\text{S/h}$ 、現在は $0.2\mu\text{S/h}$ ほどの数値で落ち着いています。排水路や芝生・校庭などのホットスポットについても、町村の判断による除染作業と並行しながら、活動制限を設定することなく、当初より、正常な教育活動が展開されています。両沼支会の中学校でも、震災直後から、双葉郡・南相馬市を中心とした地域の避難生徒を多く受け入れています。当初、6つの中学校に88名の生徒が区域外就学という形で転入しました。特に、「相互防災協定」を結んでいた会津美里町には榎葉町の役場機能(教育委員会を含む)すべて、高田中学校には榎葉中学校本部(校長・教頭・学校事務等の先生方が常駐)が移転し、生徒は部活動によって高田中学校と新鶴中学校に分かれて就学することになりました。また、会津坂下町にも葛尾村役場の出張所が開設され、生徒も坂下第二中学校(今年度より坂下中学校)などに就学しました。着の身着の儘で避難を余儀なくされた生徒がほとんどで、支会の中で連絡を密にしながら支援を行うことを確認しました。

- 1 制服、ジャージ、学用品の調達(PTA、業者等の協力を得て)
- 2 教科書の調達。就学に必要な諸費の援助(被災自治体・教育委員会と連携して)
- 3 給食の実施。スクールバスの運行(町村教育委員会の指導を得ながら)
- 4 生徒・保護者の心のケア(カウンセラーの新規配置要望や、職員の聞き取り調査を通して)
- 5 放射線の教育活動への影響(教育事務所、町村教育委員会の指導を得ながら)

…早期に全員が帰還できることを望みます。

《学校紹介》

地域とともに

柳津町立西山中学校

本校は、あかべこ発祥の地で有名な福満虚空蔵尊や再生可能エネルギーで脚光を浴びた地熱発電所がある柳津町の西部にあり、生徒数12名、2・3年複式学級の小規模校です。同じ敷地にある西山小学校とともに、地域のシンボルとして、地域の方々に見守られながら、あ：安全・健康、こ：心の教育、が：学力、れ：錬磨、をキーワードに教育活動を推進しています。地域とともに歩む本校の活動を二つ紹介します。

「落採り体験」：森林環境学習の一環として博士山の雄大な自然に触れながら親子で落を採る活動です。その売り上げは、後援会を通して生徒の活動に役立てられます。生徒数の減少に伴い、数年前より同窓会の支援を受け、西山地区の全家庭へ協力を呼びかけて実施していますが、年々収穫量は増加し、今年度は学校と同窓会合わせて1,462kgの収穫を上げることができました。また、今年はその一部を買い上げて下さった町内の方が、葛尾村の方々(昨年町内に避難)へ落を届けられたという温かい話を伺うことができました。

「小中連携と中中連携」：町内に二校ずつある小学校と中学校が、それぞれ同じ敷地にあることから、学校同士の連携が進められています。その内容は合同行事・授業など幅広く、児童生徒の交流学習や教員同士の交流が年間を通して計画的に進められています。今年度より修学旅行を合同で実施し、小学校は東京方面、中学校は沖縄へ行き、お互いに交流を深めることができました。

また、今年のは町の教育研究会が「やないづ教育ねっと(<http://yanaizu-ed.net/>)」を立ち上げ、小中学校と町教育委員会の交流・地域の方々への情報発信をはじめました。



(校長 武藤 成也)

双葉

双葉支会の活動



双葉支会長 吉田 隆見
(富岡町立富岡第一中学校)

避難エリアの再区分で広野町、川内村を除く郡内各町村は帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域の3つに色分けされようとしており、本来の地での復興は手付かずの状態であることに空しさを感じております。双葉支会11校の近況は、川内中が本来の地で教育活動をこの4月からスタートさせました。広野中、檜葉中はいわきの地（ただし、広野中はこの秋から本来の地で教育活動をさせる予定）で、富岡一中・二中は三春の地で、大熊中は会津の地で、浪江中は二本松の地で再開しています。しかしながら、浪江東中、津島中、双葉中、葛尾中の4校は未だに、再開が実現しておりません。

このような危機的状況の中、それぞれの学校、校長としての置かれている状況は様々であり、学校の先々が見えない中での課題は、山積していることも現実です。苦しい、辛いこの時こそ、支会として結束し、各教育団体としての活動のあり方、放射線対策、進路関係等について協議や情報交換の場を密にしていかなければと考え、例年同様の研修の場を設定して活動を進めております。5月15日、支部研修会を開催し、行財政部等の各部、中教研・中体連に対する支部としての取り組み方、資料を持ち寄っての自校の教育課題とその対策に関して協議を重ねました。6月5日には、相双地区中・高等学校長連絡協議会を開催し、各校の現況、課題等について情報交換を行い、この地域における高校のあり方や入試に関することへの要望は本会として関係方面に働きかけをしていくことで意見が一致しました。

かつての生徒数は激減し、それに伴っての教職員の削減、各町村の復興計画が固まらない中での今後の学校の姿が見えない不安等、大きな壁がいくつも横たわっていますが、11校の校長が一丸となって課題の解決に取り組んでいく所存です。

《学校紹介》

皆様からの支援に心より感謝します

川内村立川内中学校

この度は川内中学校の避難、帰村に際して物心両面のご支援をいただき誠にありがとうございました。

本校は原発事故による1年間の郡山市立逢瀬中学校での間借り生活を経て、この4月に故郷である川内村に帰村し、学校を再開させることができました。

生徒数は避難前の約1/4になってしまいましたが、以前同様の組織を維持し、通常の学校業務を再開させることができました。

生徒数が減少したとは言え、やはり故郷での生活は嬉しいもので、校内には笑顔があふれております。4月半ばには部活動（バドミントン部）や自校給食も再開し、初めて取り組むバドミントンに汗を流す生徒やおいしそうに給食を頬張る生徒達を見ながら、「やっとここまで漕ぎつけた」と、職員も感慨ひとしおでした。震災前には意識しなかった「普通であること」の何と偉大であったことか、つくづく痛感しております。

私自身も村での生活を生徒の家庭と共有するという意味から、村の教員住宅に居住しております。生活への若干の不便はまだありますが、生徒達、保護者の皆さん、職員と力を合わせ、震災前同様の「普通の学校」を目指して努力しております。

そのような川内中の日常の様子が本校のホームページ（ブログ）に掲載されておりますのでご覧いただければ幸いです。ブログは映像とともに毎日更新しております。

福島県内にはまだまだ故郷に帰れない学校、生徒、教職員の皆さんも多数いらっしゃる中で、私どものように帰村し学校を再開できたことは、校長会の会員の皆様をはじめとした関係各位の温かなご支援の賜と深く感謝しております。

今後ともご指導をよろしく願いいたします。



(校長 高濱 俊彦)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 新 会 員 紹 介 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

支 会	氏 名	校 名
福 島	遠 藤 彰	茂 庭
伊 達	早 崎 保 夫	県 北
郡 山	宗 形 俊 二	西 田
岩 瀬	星 喜 博	小塩江
岩 瀬	高 田 健 一	長 沼
田 村	羽 田 晃	移
西白河	佐 川 尚 史	東 北
東白川	阿久津 光 俊	矢 祭
北会津	渡 部 光 毅	磐 梯
耶 麻	近 藤 静 雄	山 都
両 沼	佐 浦 雅 明	金 山
両 沼	作 田 昌 宏	昭 和
相 馬	福 地 裕 之	玉 野

支 会	氏 名	校 名
双 葉	荒 木 幸 子	双 葉
双 葉	玉 澤 淳	楢 葉
双 葉	阿 部 央	広 野
いわき	泉 田 博 巳	久之浜
いわき	佐 藤 和 典	川 前
いわき	佐 藤 士 郎	三 和
いわき	湯 浅 伸二郎	三 阪
いわき	佐 藤 浩 子	永 井
いわき	佐 藤 隆 宏	川 部
いわき	鈴 木 重 行	上遠野
いわき	安 斎 康 仁	入遠野
いわき	田 代 新 一	田 人
いわき	岡 崎 寛 人	石 住

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 新 会 員 の 声 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

新米校長奮闘記

金山町立金山中学校長 佐浦 雅明

校長はとても忙しいと思う。教頭とは全く質の違う忙しさである。

まず、渉外的なことが多い。各校の校長先生や教職員、関係機関と頻りに連絡を取らなければならない。次に校内の教職員との相談がある。目標管理制度の面談を含め、随分話した。10人いれば10通りの悩みや希望がある。よく耳を傾け、教職員の心の内を理解し、彼らがもっとも力を発揮できる場を準備し、意欲に結び付けていかなければならない。さらに生徒との関係もより良く築く必要がある。授業や部活動の様子を観察し、声かけをし、集会でのあいさつを工夫する。生徒の活動を評価し、高い目標を持たせ、教育環境を整備しなければならない。

「校長はゴールではない」と新任校長研修会でご指導いただいた。その通りだと実感している。日々、自らの意志で挑戦し、アイデアを絞る。この瞬間のために今までの経験があったと感じている。今後も、悩み、迷い、努力することを楽しみたい。

“奏でる”

矢祭町立矢祭中学校長 阿久津 光俊

保健体育科の教員として歩んできた私ですが、オーケストラの演奏や合唱コンクールなどに少なからず興味・関心を持っていて、時々テレビで視聴します。そして、その視線の多くが、団員一人一人を一点集中させ、最高の演奏を引き出すために全身全霊をかたむける指揮者に対して注がれます。

一つ一つの音色をつなぎ、調和・融合させ、強弱をつけるなど、一体となって曲を奏でるための指揮者の指揮（素人のとらえ方になってしまいますが…）は、まさに校長としての学校経営・運営に通じると考えます。

校長として、教職員一人一人が自らの持ち味・個性を十分に発揮しながら職責を果たせるよう、さらには、それらのベクトルを同じ方向に向けさせるよう、生徒・教職員、それに保護者・地域をよく見渡し、学校経営・運営ビジョン実現のため、思いや願いを込めて丁寧に、そして、しなやかさと力強さをもって、タクトを振りたいたいと思っています。

トルストイの民話に「人は何で生きるか」という作品がある。トルストイの民話は、ロシアの昔話を土台にトルストイが民話風に創作したもので、有名な長編と違って子供も楽しめる小品だが、原始キリスト教的なトルストイの思想の核をなす珠玉の作品群である。

「人は何で生きるか」は、神の言いつけに背いた天使が、力を奪われ、三つの問題を出されて人間界に落とされた話である。天使は若者の姿にされ、冬のロシアの夜の村に裸で放り出され、ふるえている。そこに貧しい靴屋の男が通りかかり、自分のオーバーをかけてやって家に連れ帰る。食べるのにも困っている靴屋の夫婦は口論になるが、若者の面倒をみる。若者は靴屋の弟子になり、靴作りを手伝い始める。その生活の中で神が出した問題の答をみつけ、わかるとにこっと笑うのである。

ある時、金持ちの男が靴屋に立派な革を持ち込み、一年はいても形の崩れない長靴を作れという。作れば褒美をくれるが、形が崩れれば罰するという。靴屋は自信がないが、若者はにこっと笑って引き受け、靴屋は長靴の寸法をとる。

金持ちが帰ると、若者は型紙もとらずさっさと革を切り、スリッパを作ってしまう。靴屋は怒られると思って頭を抱えるが、金持ちの召使いが戻ってきて、金持ちが先ほど亡くなったので、長靴はいらない、棺に入れるスリッパを作れという。

若者は、かつて自分の仲間だった死の天使が、金持ちを迎えにきていたのが見えたのだ。そして神が出した問題の一つ「人には何が与えられていないか」の答がわかったので、にこっとしたのだった。人間には自分がどうなるか、自分の未来を見通す力は与えられていないのだ。一年先を考えて長靴を求めたが、必要なのは今日、棺に入れるスリッパだった。

人は誰でも未来を見通したいと思う。それは損得が一番の理由だろう。他人より少しでも先を見通せる者が儲かるのが経済の原理だし、大病、事

故、事件、大きな失敗をしたくない思いもある。

科学が進歩して世の中のことはずいぶん予測できるようになってきた。気まぐれなものの代名詞だった天気も予報はよく当たる。しかし、時として現実には予測のずっと上をいき、半世紀前に描いたばら色の未来は一瞬で暗転する。

紙を両手で引っ張ってだんだん力を強くしていけば、いつかは破れると予想できる。しかし、どれ位の力で、いつ、どこが破れるかは予測できない。繰り返し実験ができれば統計的、確率的に予測できるのみである。地震のような破壊現象や人の生死のような不連続な現象は、いつ、どこでは予測できない。まして自分のこととなると、明日のこともわからない。

でもそれで良いのだろう。愚かといわれても、損をしても、わからないから救われる面もある。「誤解の福音」という言葉を聞いたことがある。誤解されて損をすることもあるが、お互い様だし得をしたり救われることもあるので、いちいち訂正することはない、といった意味らしい。

世の中が進歩して賢い人が増えてきた。傍目（おかめ）八目、他人のことはよく見えるので、自ら

を被害者の立場に置いて、予測して備えなかったことや誤解されたことを追究し非難する姿勢が増えていて、違和感を感じる。元々人間には自分がどうなるかすら、見通す力は与えられていない。それを前提に物事を考えるべきだろう。

「イワンのばか」など、トルストイの民話は賢くない人々の物語である。昔はよく読まれ、年齢が上の方はご存知の方も多いと思う。童話として様々な出版社から出され、岩波や角川の文庫にもなっていたのだが、今は大きな本屋でも見かけない。幸い今はネットの古本屋で簡単に入手できる。でもそれはあくまで知っている人だからであって、知らない人がふらっと本屋で手にすることはできなくなっている。このまま失われていくには惜しい作品群である。

随想



福島県中学校長会副会長
齋藤 順至
(相馬市立向陽中学校)

人は何で生きるか